精神作用を表す身体部位詞の史的展開　―＜胸＞と＜頭＞を中心に―

後藤　秀貴（大阪大学［院］）

1　はじめに

◆　精神作用を表す身体部位詞「むね」「あたま」の比喩的用法 [i]

(1)　むねが潰れる／むねが弾む／むねの内／むねに刻む

(2)　あたまを冷やす／あたまを使う／あたまが足りない／あたまに入れる

◆　従来の認知言語学的アプローチ：共時的データ（現代語）に基づく観察と分析、意味の体系化

◆　本発表の方針：＜胸＞＜頭＞と精神作用の対応の史的展開の観察と分析 (cf. Swan 2009)

2　先行研究と調査課題

◆　現代日本語の＜胸＞＜頭＞（e.g. 田中 2003；有薗 2007；後藤 2015, 2018a）

(3)　【悲しみ・不安】むねが潰れる 【喜び・期待】むねが弾む 【苦悶・恋慕】むねを焦がす 【恐怖】むねを冷やす 【嫌悪】むねが悪い 【怒り】むねが煮える 【驚き】むねを突く 【感銘】むねに響く 【感情の高ぶり】むねに迫る【感情の解消】むねが開く 【本心】むねの内 【考え・意図】むね［むな］算用 【覚悟・決心】むねを定める 【理解・納得】むねに落ちる 【記憶】むねに刻む 【度量】むねが狭い 【性向】むねがいい

(4)　【怒り】あたまに来る 【興奮の抑制】あたまを冷やす 【思考（苦悶）】あたまを砕く 【考え】あたまを擡げる 【思考】あたまを使う 【思考力】あたまが足りない 【記憶】あたまに入れる

◆　後藤 (2018b)：『日本国語大辞典（第二版）』に基づく＜腹＞の意味の史的観察と分析

(5)　中古・中世～：【怒り】はらを立てる／はらに据えかねる 【不満】はらが脹れる 【可笑しさ】はらを抱える 【性向】はらが汚い 近世・近代～：【度量】はらが大きい 【理解・納得】はらに落ちる 【考え・意図】はらに一物 【覚悟・決心】はらを括る

◆　調査課題

I.　＜胸＞＜頭＞と精神作用の結びつきはどのような史的展開を見せたか

II.　＜胸＞＜頭＞（＜腹＞）の意味の史的展開にどのような共通性・相違性が見られるか

3　調査方法

✓ 本発表では、＜胸＞＜頭＞を指す身体部位詞のうち、一形態から成る語を調査対象とする [ii]

＜胸＞	＜頭＞
むね（上代～）／むな（上代～）	かしら（上代～）／こうべ［かうべ］（中古～）／あたま（中古～）／ず［づ］（中世～）

表 1. 精神作用への意味拡張が見られる＜胸＞＜頭＞の身体部位詞（『現代語古語類語辞典』『日本国語大辞典（第二版）』）[iii]

＊ ＜頭＞を指す語の消長・交替（宮地 1979；『日本国語大辞典（第二版）』）

「かしら」（上代～）…古代の代表語であり、現代の「あたま」に相当

「こうべ」（中古～）…現代の「とうぶ」に近く、中世末期にはすでに古語化傾向

「あたま」（中古～）…顱門→頭頂→頭と指示範囲を広げ、中世末期～近世初期に＜頭＞の代表語となる

✓ 『日本国語大辞典（第二版）』の（子）見出しのうち、［表 1］のいずれかの語を含み、精神作用を表す表現の初出例を時代毎（上代 [-793]・中古 [-1191]・中世 [-1602]・近世 [-1867]・近代 [-1944]・現代 [1945-]）に分類する

✓ 表現については、『日本国語大辞典（第二版）』に合わせて参考文献欄に記載の辞書も参照した

4　＜胸＞＜頭＞と対応する精神作用の広がり

✓ 初出の時代が先行する場合を除き、本発表では以下の基準に従って表現を示す

・表現の異なり認定および表記は『日本国語大辞典（第二版）』の（子）見出しを基準とする

・表現の構成要素の動詞は形態として基本的なものを（「むねを躍らす」→「むねが躍る」）、基本形が自他両方存在する場合は自動詞を代表とする

・名詞相当の表現に動詞あるいは形容詞を用いた表現が存在する場合、後者を代表とする（「むねの躍」→「むねが躍る」／「むね苦しさ」→「むねが苦しい」）

✓ 各表現が表す精神作用の分類においては『日本国語大辞典（第二版）』の定義・用例に加え、有薗 (2007) 、後藤 (2015, 2018a) を参照し、中心的な意味と考えられるものを基準とした

4.1　＜胸＞＜頭＞と精神作用が間接的に関係するメトニミー表現

◆　精神作用に伴う一般的なしぐさ・姿勢

(6)　【悲しみ】むねを打つ［上代～］　【当惑・苛立ち・恥じらい】かしらを掻く［中古～］／（気の毒の／頭巾越しに）あたまを掻く［近世～］　【満足・苛立ち・疑念】あたまを叩く［中世～］【当惑】あたまを抱える［近代～］【疑念・思考】かしらを傾ける［中古～］／ずを傾ける［近世～］／あたまを拈る／こうべを傾ける［近代～］【落胆】あたまを垂れる［現代～］

◆　特定の伝達的機能を持つ姿勢

(7)　【自信】むねを張る［近代～］　【敬意】あたまが上がる［近世～］／ずが高い［近世～］／あたまが下がる［近代～］／ずが上がらぬ［現代～］

4.2　＜胸＞

4.2.1　上代

(8)　【悲しみ】むね痛し　【不安】むね安からず

(9)　魂（たましひ）は朝夕（あしたゆふへ）にたまふれど 吾（あ）が胸痛（むねいた）し恋（こひ）のしげきに〈狭野弟上娘子〉（万葉集 8C 後 一五・三七六七）[iv]

4.2.2　中古

(10)　【悲しみ・不安】むねが｛裂ける／せく／潰れる｝／むね｛苦し／拉ぐ／塞がる｝　【悲しみ】むねに釘打つ　【不安】むねが騒ぐ／むね走る　【苦悶・恋慕】むねが燃える／むね焦がる／むねの｛煙／氷／火／炎｝／むねを焼く　【恐怖】むねを冷やす　【感情の解消】むね（の隙）開く

(11)　【本心】むねの内　【性向】むね汚し

(12)　いとどなよなよとあえかにて臥したまへるを、むなしく見なして、いかなる心地せむと、胸もひしげておぼゆ［薫が重篤の大君を訪問した際、彼女の死を予感して嘆き悲しむ場面］（源氏物語 1001–1014 頃 総角）

(13)　頭中将を見給ふにも、あいなく胸騒ぎて、かの撫子（なでしこ）の生ひ立つありさま聞かせまほしけれど［源氏が夕顔の消息を伝えなかったことを咎められるのではないかと心配する場面］（源氏物語 1001–1014 頃 夕顔）

4.2.3　中世

(14)　【喜び・期待・不安】むねが躍る　【苦悶・恋慕】むねの霧　【感銘】むねに当たる

(15)　【考え・意図】むねに持つ

(16)　おりてまいらばやと存る、いそひでまいらふ、いつも参るとちがふて、胸がおどるよ［ある僧が他人の屋敷の桜を一枝折って持ち帰り、翌日再び盗みに来る場面］（虎明本狂言・花盗人 室町末〜江戸初）

4.2.4　近世

(17)　【感情の抑制】むねに手を置く／むねを｛抑える／摩る／抱く／撫で下ろす／撫でる｝

(18)　【悲しみ・不安】むねがはり裂ける　【悲しみ】むねに｛釘針を刺す／焼き鉄を刺す／鑢を掛く｝　【喜び・期待】むねを轟かす　【苦悶・恋慕】むねに焚く火／むねの｛雲／闇｝　【嫌悪】むね［むなくそ／むねくそ］が悪い／むねに障る　【怒り】むねが煮える／むねくそが沸く／むねの虫　【驚き】むな突く／むねを突く　【感銘】むねに｛応える／響く｝　【感情の高ぶり】むな｛支え／つまらし｝／むねが｛迫る／つかえる｝　【感情の解消】むねが｛下がる／霽れる｝

(19)　【本心】むな底／むねに｛納める／畳む／包む｝　【考え・意図】むな積／むね［むな］算用／むね［むな］工／むねに｛ある／一物｝　【覚悟・決心】むねを｛極める／据える／定める｝　【理解・納得】むねに落ちる　【性向】むねが｛いい／悪い｝　【度量】むねが狭い

(20)　先（さき）は正直、喜んで、はや談合（だんかふ）が極（きは）まつたか。さても胸をついたこと、誰にどふと談合せん［身請けの話を持ちかけられた遊女が、突然の事態に戸惑う様子］（浄瑠璃・淀鯉出世滝徳 1709 頃 下）

(21)　浮世はみな／＼夢じや物月 胸を定柳が浦よりどんぶりと（俳諧・西鶴大矢数 1681 第六）

4.2.5　近代［現代］

(22)　【感情の抑制】むねに手を当てる

(23)　【悲しみ】むねを｛噛む／刺す｝【不安】むな揺らぎ　【喜び・期待】むねが弾む／むねを｛ときめかす／脹らます｝　【驚き】むねを打つ［現代〜］　【感情の高ぶり】むねが｛一杯になる／張る｝　【感情の解消】むねが収まる

(24)　【本心】むね三寸に｛畳む／納める］／むねを｛明かす／割る｝　【考え・意図】むな勘定　【記憶】むねに｛浮かぶ／刻む／彫り付ける｝　【度量】むねが広い

(25)　此身ハ壁によせかけた哀れ気な書像といふ義 といふ西班牙（いすぱにや）の奇異譚（ロマンス）の二句が胸に浮んだ［主人公が一目惚れした婦人に仮面舞踏会で偶然再会する場面］（めぐりあひ 1888–89〈二葉亭四迷訳〉二）

(26)　此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ほろ／＼こぼれて一ト言もなし［寄宿先の娘に恋をした主人公が、地元での縁談のために帰郷することになり、別れを告げる場面］（ゆく雲 1895〈樋口一葉〉下）

4.3　＜頭＞

4.3.1　近世

(27)　【思考（苦悶）】あたまを砕く／（気の毒の）あたまを割る／かしらが重い／こうべを割る

(28)　勿体（もったい）ない事斗（ことばかり）」と、走早（あしばや）に帰（かへ）られぬ。主（あるじ）気の毒（どく）の頭（あたま）を割（わ）って思案（しあん）する中（うち）に［遊女が梅毒を患ったと嘘をつき、身請けを申し出た大臣を欺き諦めさせる場面］（浮世草子・傾城禁短気 1711 三・三）

4.3.2　近代

(29) 【怒り】あたまに来る　【興奮の抑制】あたまを冷やす

(30) 【思考（苦悶）】あたまを｛痛める／悩ます｝　【考え】あたまを擡げる　【思考】あたまを｛搾る／使う｝　【思考力】あたまが遅れる【記憶】あたまに｛付く／入る｝

(31) だから吾儕（われわれ）も頭を痛めて居るのさ。まあ、聞き給へ［主人公が新平民としての素姓を隠しながら働いていることが噂として流れ、同僚が困り果てる場面］（破戒 1906 〈島崎藤村〉 一八・二）

(32) 恥ずべき端（はした）ないことを思っていた…と、省みて自分を誡（いまし）めながら、ついまた他のことに頭を使ふともなく使って［主人公が失踪した妻に対する己の思いを反省する場面］（疑惑 1913 〈近松秋江〉）

4.3.3　現代

(33) 【思考力】あたまが｛切れる／足りない／回る｝／あたまの回転が早い

(34) この頭のきれる弁護士は、中国人にしては酒があまりいけない（カクテル・パーティー 1967〈大城立裕〉前）

(35) 団地サイズの棺をあつらえんと、表に出せんのとちゃいますか。」先生が頭の回転の早いとこをみせ［主人公らが、団地向けの葬儀ビジネスを模索する場面］（とむらい師たち 1966 〈野坂昭如〉）

5　まとめと議論

時代区分	上代〜	中古〜	中世〜	近世〜	近代〜	例
ターゲット	ソース					
悲しみ	痛み	刺激 閉塞（感）・圧迫・破裂				むね痛し／むねに釘打つ／むねを刺す むね苦し／むねが潰れる／むねがはり裂ける
不安	動揺	閉塞（感）・圧迫・破裂				むね安からず／むねが騒ぐ／むねが躍る むね苦し／むねが潰れる／むねがはり裂ける
喜び・期待			動揺	鼓動	膨張	むねが躍る／むねを轟かす／むねが弾む むねを脹らます
苦悶・恋慕		燃焼 天候				むね焦がる／むねの火／むねを燃やす むねの霧／むねの雲／むねの闇
恐怖		冷却				むねを冷やす
嫌悪				悪（不快感）		むね［むなくそ／むねくそ］が悪い
怒り				沸騰 虫		むねが煮える／むなくそが沸く むねの虫
驚き				刺激		むな突く／むねを突く
感銘			刺激（への呼応）			むねに当たる／むねに響く
感情の高ぶり				上昇・閉塞	一杯・膨張	むねが迫る／むねがつかえる むねが一杯になる／むねが張る
感情の抑制				しぐさ		むねに手を置く／むねを撫で下ろす
感情の解消		開放		下降 天候	安定	むね（の隙）開く むねが下がる むねが霽れる むねが収まる
本心（を隠す・明かす）		内部		収容	開放	むねの内／むな内／むな底 むねに納める／むねに畳む／むねに包む むねを明かす／むねを割る
考え・意図			保持	存在 計算		むねに持つ／むねにある／むねに一物 むね［むな］算用／むな勘定
覚悟・決心				決定・固定		むねを極める／むねを据える／むねを定める
理解・納得				取込		むねに落ちる
記憶（の想起）					銘記 浮上	むねに刻む／むねに彫り付ける むねに浮かぶ
度量				広さ		むねが狭い／むねが広い
性向		汚		善悪		むね汚し／むねがいい／むねが悪い

表 2. ＜胸＞と対応する精神作用の広がり

時代区分	上代・中古・中世〜	近世〜	近代〜	現代〜	例
ターゲット	ソース				
怒り			到達		あたまに来る
興奮の抑制			冷却		あたまを冷やす
思考（苦悶）		倦怠感・損傷・痛み			かしらが重い／あたまを砕く／あたまを痛める
考え			持上		あたまを擡げる
思考			搾取 使用		あたまを搾る あたまを使う
思考力			速さ	不足	あたまが遅れる／あたまの回転が早い あたまが足りない
記憶			取込 付着		あたまに入る あたまに付く

表 3. ＜頭＞と対応する精神作用の広がり

◆ 時代毎の傾向（＜腹＞＜胸＞＜頭＞）

～中世：感情中心　近世～：その他側面との対応の広がり（考え・意図、覚悟・決心、理解・納得、記憶、思考）

◆ ＜胸＞の特徴 [v]

✓ 感情との結びつきが最も強く、中世以前に対応が確認される精神作用の種類が＜腹＞＜頭＞よりも多い

→身体経験（痛み・動悸・閉塞感・不快感・体温変化）による動機付け（有薗 2007；後藤 2015）

→概念メタファー理論の身体経験の（半）普遍性の想定（e.g. Kövecses 1995, 2005）とも整合

✓ その他の精神作用との対応は、＜腹＞と同様に近世までに出揃う（記憶を除く）

◆ ＜頭＞の特徴

✓ 感情との結びつきが最も弱く、中世まではしぐさや姿勢など、外から視覚的に認識できるメトニミー表現のみ

✓ 近世になると苦悶などの情緒的な要素を孕む思考表現（有薗 2007）が現れる。ただし、思考（力）・記憶を合わせた知的側面との結びつきが確立するのは近代以降であり、＜胸＞＜腹＞と比べて現代に通じる意味体系の成立は遅い

◆ 精神の座としての＜頭＞の理解の知識的動機付け（cf. 宮地 1979）

～中世：東洋医学における五臓六腑　近世～：西洋医学の流入、精神作用を司る頭の働き

(36) 頭は円形で、全身の上にある精神作用の中心となる場所である（解体新書 1774 〈杉田玄白ほか〉 巻の二第六）

(37) 頭の所蔵するものは、脳と意識である（解体新書 1774 〈杉田玄白ほか〉 巻の二第六）

(38) atamani chiyega aru naraba, yenriomo nŏ ygauano nacayeua fairumaizo（頭に知恵があるならば、遠慮も無う井川の中へは入るまいぞ）（天草本伊曽保物語 1593 狐と野牛の事）

→医学書、他言語由来のテキストなど、特定のジャンルでは近世以前にも精神の座としての＜頭＞を示唆する事例があるが、こうした知識が広く人々の理解を得るには時間を要したと考えられる（cf. 宮地 1979）

6 結論

I. ＜胸＞：情緒的な精神作用との対応が早期から豊富に現れ、近世には＜腹＞と同様にその他の精神作用を合わせた意味体系が整う。情緒的な精神作用との対応が早期から確認される要因として、感情経験に伴う身体経験が＜胸＞で豊かであることが考えられる。

II. ＜頭＞：中世まではしぐさや姿勢の表現が存在するに過ぎず、現代日本語において中心となる精神の知的側面との対応は近世以降徐々に広がり、近代から現代にかけて確立する。身体経験が豊富とは言い難い＜頭＞が精神の座として理解されるには、近世以降の文化的知識の流入と普及が必要であったと考えられる。

---

[i] 本発表では、いわゆる現代語の「むね」「あたま」が指す身体部位を＜胸＞＜頭＞と表記し、各語は仮名で示す（用例の表記は出典に従う）。

[ii] 複数の形態から成る身体部位詞には漢語が多く含まれ、例えば＜胸＞については「胸臆」「心胸」「胸膈」などで精神的な意味での使用が確認される（それぞれ中古～、中古～、近世～『日本国語大辞典（第二版）』）。なお、調査対象語のうち「ず［づ］」のみ漢語由来である。

[iii] 各語の（古）辞書記載は以下の通り（『日本国語大辞典（第二版）』）。

	むね	むな	かしら	こうべ［かうべ］	あたま	ず［づ］
中古	和名・名義		和名・名義	和名・名義	和名・名義	
中世	色葉・和玉・文明・天正・饅頭・黒本・易林		色葉・和玉・文明・伊京・明応・天正・饅頭・易林	色葉・和玉・文明・饅頭・黒本	色葉・和玉・文明・饅頭・易林	
近世	下学・日葡・書言		下学・日葡・書言	日葡・書言	日葡・書言	日葡・書言
近代	ヘボン・言海	言海	ヘボン・言海	ヘボン・言海	ヘボン・言海	ヘボン・言海

[iv] 以後、用例中の下線は全て発表者による。また、用例の表記は参考文献に記載の底本に従った。

[v] 宮地 (1979) によれば、現代では精神的な意味に限定される「こころ」も上代では心臓のあたりを指して用いられていた形跡があり、万葉集では、動悸し、痛み、くだけ、思い、知り、かなしみ、いきどおるものとして描かれている。従って、「こころ」の意味が身体的なイメージに由来するのだとしたら、それは「むね」よりも早い段階で広く精神との結びつきを実現していたことになる。「こころ」を含めた＜胸＞の分析については今後の課題としたい。

参考文献

有薗智美 (2007)「「頭」「胸」「腹」－精神活動の在り処としての身体部位詞－」,『日本認知言語学会論文集』第 7 巻, 310–320, 日本認知言語学会. 後藤秀貴 (2015)「「腹」と「胸」を参照した日本語の比喩表現とその特徴－比喩的認知を生み出す身体基盤・文化基盤の観点から－」,『日本言語学会第 151 回大会予稿集』, 40–45, 日本言語学会. 後藤秀貴 (2018a)「日英語の頭部の理解をめぐって－理性・知性の座としての「頭」と head－」,『言語文化共同プロジェクト 2017 レトリック、メタファー、ディスコース』, 29–42, 大阪大学大学院言語文化研究科. 後藤秀貴 (2018b)「精神作用を表す「腹」の比喩的意味の広がりについて－通時的観察と認知言語学的分析－」, 大阪大学言語文化学会第 54 回大会（大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会）(2018/10/27) 発表資料. Kövecses, Zoltán (1995) “Anger: Its Language, Conceptualization, and Physiology in the Light of Cross-Cultural Evidence,” *Language and the Cognitive Construal of the World*, ed. by John R. Taylor and Robert E. MacLaury, 181–196, Mouton de Gruyter: Berlin and New York. Kövecses, Zoltán (2005) *Metaphor in Culture: Universality and Variation*, Cambridge University Press, New York. 宮地敦子 (1979)『身心語彙の史的研究』, 明治書院. Swan, Toril (2009) “Metaphors of Body and Mind in the History of English,” *English Studies*, 90 (4), 460–475. 田中聡子 (2003)「心としての身体－慣用表現から見た頭・腹・胸－」,『言語文化論集』第 24 巻 2 号, 111–124, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.

＜辞書＞潁原退蔵（著）・尾形仂（編）(2008)『江戸時代語辞典』, 角川学芸出版. 上代語辞典編修委員会（編）(1967)『時代別国語大辞典上代編』, 三省堂. 室町時代語辞典編修委員会（編）(1985–2005)『時代別国語大辞典室町編』, 三省堂. 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義（編）(1982–1999)『角川古語大辞典』, 角川書店. 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）(2000–2002)『日本国語大辞典（第二版）』, 小学館. 芹生公男 (2015)『現代語古語類語辞典』, 三省堂.

＜用例出典＞（通し番号順）小島憲之ほか（訳・校注）(1994–1996)『新編日本古典文学全集 9 万葉集 4』, 小学館. 紫式部（著）・阿部秋生ほか（訳・校注）(1997)『新編日本古典文学全集 24 源氏物語 5』, 小学館. 紫式部（著）・阿部秋生ほか（訳・校注）(1994)『新編日本古典文学全集 20 源氏物語 1』, 小学館. 大塚光信（編）(2006)『大蔵虎明能狂言集 翻訳註解 下巻』, 清文堂出版. 近松門左衛門（著）鳥越文蔵ほか（訳・校注）(1997)『新編日本古典文学全集 74 近松門左衛門集 1』, 小学館. 前田金五郎 (1986)『西鶴大矢数注釈 1』, 勉誠社. 二葉亭四迷（著）・十川信介・安井亮平（編）(1986)『二葉亭四迷全集 2』, 筑摩書房. 樋口一葉（著）・伊藤整ほか（編）(1962)『日本現代文学全集 10 樋口一葉集』, 講談社. 野間光辰（校注）(1966)『日本古典文学大系 91 浮世草子集』, 岩波書店. 島崎藤村 (1968)『現代日本文学大系 13 島崎藤村集 1』, 筑摩書房. 近松秋江（著）(1997)『黒髪・別れたる妻に送る手紙』, 講談社. 大城立裕 (2011)『カクテル・パーティー』, 岩波書店. 野坂昭如 (2007)『野坂昭如ルネサンス 5 とむらい師たち』, 岩波書店. 杉田玄白ほか（訳著）・酒井シヅ（現代語訳）(1998)『新装版解体新書』, 講談社. 福島邦道（解説）(1976)『天草版伊曽保物語』, 勉誠社.